



一瞬、地震かと思ったが、そうではなかった。

脈打つように規則正しく大地が揺れる。  
心なしか近付いてくるようだった。

ベンチの板をぎゅっと握りしめながら、加夏子の心に引っかかってくるものがあった。

あれ？  
どこかでこんなこと、あったような

……

地響きが後ろで止まった。  
ハッとして思い切り振り返った。

「おね～えちゃん」  
「うそ…どうして…」

ふらりと立ち上がった加夏子は、一歩二歩、歩いたと思う間に走り出した。  
目の前の肉の壁に身体ごとぶつかり、身体じゅうで抱きついた。

「ヨシオ！ ホントにヨシオだよねっ！？」  
「ウン、そだよ。おねえちゃん、あるけるようになったの？」  
「そうよ、歩けるようになったんだよ！ ヨシオやみんなのおかげで！！」

佐野碧を追って尾道へ行った加夏子を、衣笠恵美子の依頼でさらったゴロツキ漁師達の仲間。  
その人間離れした巨体に無垢な子供の心を宿し、加夏子の脱出に手を貸そうとして実の父親に鉾を打ち込まれ重傷を負った少年。  
どこから見ても少年には見えないが、これで14歳の、見かけよりはるかに優しい心を持った加夏子の恩人であった。

尾道を去る時、最後の最後まで気にかかっていた存在…

加夏子は涙が溢れて止まらなかった。

「よかったね、じぶんであるいてゆうえんちとか、いけるんだね」  
「うん！ うん！！ でもヨシオ、どうしてここにいるの？ おなかのキズはいいの？」  
「だいじょうぶだってセンセイがいった。でね、センセイがいっしょに東京にきてっていったんだ」  
「そのセンセイって…」

「僕だよ、お姫サマ」

いつの間にかそばに来ていた九十九が、ヨシオの後ろから声をかけてきた。

「長官」  
「驚くほど傷の回復が早くてね。父親が逮捕されて、彼は施設に引き取られる筈だったんだが…まあ、無理だったのは

判るよね。それで僕が身元引受人になって、乃木修司と一緒にここへ転院させたのさ」

衣笠恵美子の恋人だった乃木修司は、佐野碧のサイコインでアルツハイマーから回復したものの精神に異常をきたしていた。九十九は彼の担当医でもあったのだ。

「しかし… 偶然っていう名前の神様はホントにいるんだなあ」

九十九が呟いた。

◇

難しい顔で押し黙る恒彦の前に、これまた難しい顔の紗季子が座っていた。  
清水家のリビング。どんよりと重苦しい空気が澱み漂っていた。

「こんなことは許さんぞ、サキ」  
「許す許さないの問題じゃないのよ、あなた。命の問題なんです」  
「『命の問題』って切り出せば俺がスンナリ引っ込むとでも思ったか」  
「そうじゃなくて」

ダンッ！！

ごつい拳をテーブルに叩きつけ、恒彦は紗季子の口から出かかった言葉を潰した。

「二人はいくつだ？ 結婚してるのか？ いや結婚出来るのか？ 未成年のくせにやることやって『子供ができました』だと！？ 病人だからってな、やっていいことと悪いことの区別くらいつくだろうが！」  
「そんな言い方しなくても…」  
「盛りのついた犬猫じゃないんだぞ！ 判らんのか、カナもあの子も！！」  
「落ち着いてください、あなた」  
「落ち着いてるわいっ！！」

………

「まともにお話できそうもありませんね。わかりました、ワタシも言いたいことだけ言います」

目を細めた紗季子が淡々とした口調で告げた。

「あの子は産むつもりです。ワタシはあの子のしたいようにさせてあげるつもりです。あなたが反対なさるなら、あの子を連れてこの家を出ます」  
「…いま何と聞いた」  
「ここを出て、加夏子と二人で暮らします。蓄えならありますから」  
「そんな事は許さんぞっ！」  
「だから、許す許さないの問題ではないとさっきも言いましたよね」  
「おまえ自分が何を言ってるのかわかってんのか！？」  
「よくわかっています」  
「何故だ？ 何故そうなる！？ おまえは加夏子が可愛くないのか！ あの歳で子供なんて、どう考えたっていい訳ないだろ！ 普通の親なら反対するに決まってるじゃないか！！ それともアレか、後妻のオマエにゃたいした事じゃないってのか！？」

紗季子の顔が能面のように無表情になった。

恒彦は瞬時に、自分が決して言ってはならない事を口走ってしまったと悟ったが、もう手遅れだった。

間の抜けた呼び出し音が電話から響いた。  
立ち上がった紗季子が受話器を取り上げる。

「病院からです」

受話器を脇に置き、紗季子は黙ったまま奥へと消えた。

◇

山の手の住宅街へ向かう坂道を、異形の大男がズシズシと登っていた。

ゆうに2 mを超えているであろう巨体。

異様な短足の上に映画のハルクのような筋肉だらけの胸、腹、腕。オマケ程度に乗かった頭。肩には女の子を座らせていた。

道行く人は例外無く振り返り、呆れた顔で見上げていた。

映画の撮影か何かと勘違いして写メする者もいた。

キングコングというより、まるで巨大蟹の逆襲とでもいった風情であった。

加夏子は降ろしてくれと何度も言ったが、当のヨシオは点のような目を細めニコニコしながら地響きを立て歩き続けた。その後ろをニヤけた九十九がついてゆく。

「いいなあ、ラクチンで。この坂、けっこーキツイよお〜」

いつものC調言葉で九十九が加夏子に話しかけた。

「じゃあ交代しよ」

「乗ってるのはヨシオくんだからなあ〜」

「交代してください！ させてくださいっ！ おねがいっ！！」

「君の為にはいいことさ」

加夏子の悲痛な叫びを無視した九十九が前に回り込んだ。

「お腹に負担はかけない方がいいだろう？」

「え…」

加夏子の顔が青くなった。

「長官…知って、るんですか…」

「ある人から聞いた」

「誰？ ママ？」

「違う」

「じゃあ…」

「わけあって名前は言えない。君を見守っている大人の中の一人だとだけ言っておこう」

「誰にも言ったことないのに。ママは気づいてたけど」

「大人をナメんなよ」

九十九が両手でピストルを形作ってみせた。バンバンと撃つ仕草をする。

「僕は賛成も反対もしない。必要な処置や手配を依頼されれば動くだけだ」

「…ごめんなさい…」

「あやまることじゃないさ。他人のそういう事には興味を持たないようにしているんだ」

「どうしてですか？」

「精神科医としての心得、かな」

九十九が気取ってウィンクしてみせた。

「センセとおねえちゃん、なにはなしてるの？ ボクわかんないよ」

「ゴメンゴメン！ ヨシオ、あのね…」

「このまま家まで乗っけてって、て事さ。ヨシオくん」

「ちょっ、長官っ！」

「ウン、いいよ。おねえちゃん、とっても軽いし。ボクだってラクチンだい！」

ヨシオの歩幅が更に増した。